

春の妖精－スノードロップ

藤原 道夫

2020年ノーベル文学賞受賞者 L. グリュックの作品に「Snow Drops」という詩がある。これは当クラブ会員から訳文とともにすでに紹介された。作者はこの詩で、早春に白い可憐な花を付けるスノードロップが過酷な冬に耐える様子を擬人化し、また抽象的に表現している。この花に関連して昔のことが思い出される。

スノードロップを知ったのはトロント大学（カナダ）に留学していた時だった。3月末か4月初めだったか、新聞に大きく花の写真が載り「ようやく春の兆しがみえてきた」という見出しがついていた。どこかで咲きはじめたのだろうか。

トロントの冬は、雪はさほど降らないものの、厳しく長い。草も木も死に絶えてしまうのではと思うような厳冬が去り、4月になって気温が0℃をこえると温かさを感じた。4月末になると若草が萌え、若芽がふき出してきた。今思うと、グリュックの詩に実感できる季節の移り変わりだった。

スノードロップの実物を見たのは5月になって公園の一角で。その頃トロント郊外の陽当たりのよい雑木林には、トリリアム（オオバナノエンレイソウの類）の群生がみられるようになる。この花を見によく出掛けた。その際スノードロップを見かけたことがない。

スノードロップ（雪雫）によく似た花としてスノーフレーク（雪片）が知られている。両方ともヒガンバナ科だが属が違う。前者は花に切れ目が入っており、後者は花が釣り鐘状に咲いて鈴蘭水仙とも呼ばれる。花期にも差があり、前者が約1か月早い。両方の花を見比べてみると、名前を逆にした方がふさわしいのではないかと思う。スノードロップの和名は雪待草とある。この花は雪が融け去るのを待って咲くので、この名に違和感を覚える。

冬に入った今、春が待ち遠しい。厳冬の間にもスノードロップの根は、人の思惑とは無縁に、地下で着々と芽生えの準備をしている。寒い冬を乗り越え、早春に芽生え花を咲かせればこそ人々は花々に妖精の姿を感じ、愛おしさを深くする。